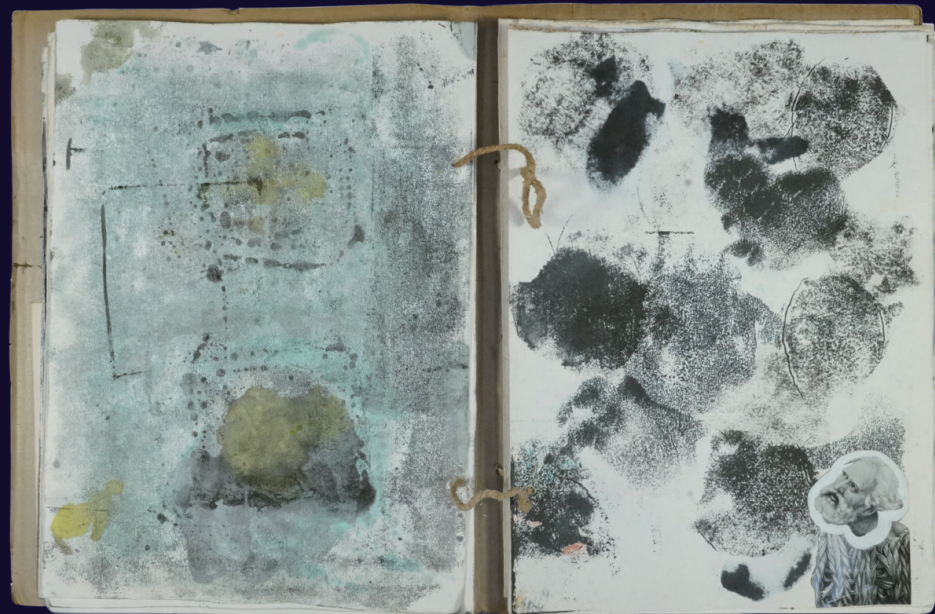


Shuzo Takiguchi——Double, or Shadow-Image

瀧口修造と分身あるいは影像



『マティアス・グリュネヴァルトの失われた日記、または画家のハンドブック』（1960年）

吸取紙とは何ものである。それは、それ自体によって残存する。それはこの今である。私はそれを保持し続けるだろう。瀧口修造 一九六〇年

[Blotting paper is something. It remains by itself. It is this now. I will keep it.
Shuzo Takiguchi, 1960.]

瀧口修造による以下二冊の「手づくり本」に記載されている文：『マティアス・グリュネヴァルトの失われた日記、または画家のハンドブック』[LOST DIARY OF MATTHIAS GRÜNEWALD OR PAINTER'S HANDBOOK]（一九六〇年）『吸取紙とは何ものである、等々…』[BLOTTING PAPER IS SOMETHING, ET CETRA...]（一九六一年）

開館時間：9:30–18:00（入館は17:30まで）

休館日：毎週水曜日、10月13日(火)、11月24日(火)

観覧料：コレクション展観覧料が必要です。一般350円（280円）

*（ ）内は20人以上の団体料金

* 70才以上と大学生以下の方はコレクション展観覧料無料

* 企画展観覧券で入場当日に限りコレクション展も観覧可能

関連企画

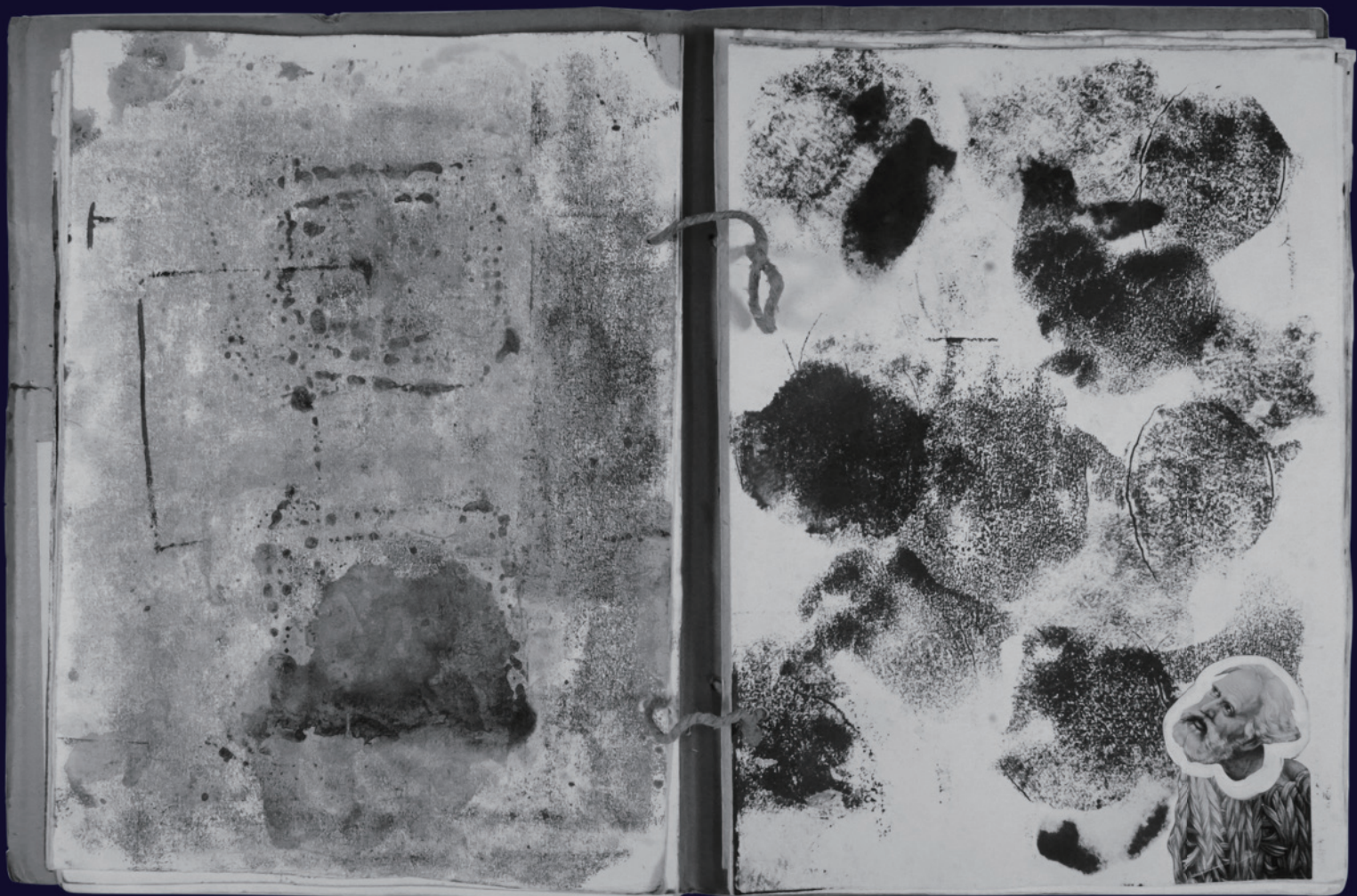
「ナビエプリエ04：瀧口修造と影でもあるいは影像人間」

2026年12月5日、13–16時 | 慶應義塾大学三田キャンパス東館6階G-Lab

主催：慶應義塾大学アート・センター／協力：富山県美術館

2026年9月25日-12月28日 | 富山県美術館 3階 展示室6

主催：富山県美術館、慶應義塾大学アート・センター



詩人・美術評論家の瀧口は一九六〇年頃から通称「手づくり本」と呼ばれる本を作っていた。出版社や印刷所のプロセスを経ない、瀧口自身の手仕事による本であり、ドローイング、雑誌の切り抜き、印刷物のコピー、銀紙、ラベル・シール、手書きのメモ等、いわゆる断片の寄せ集めによって構成され、完成にも、未完成にも見える本である。

本展では吸取紙を用いた二冊の「手づくり本」「マティアス・グリューネヴァルトの失われた日記、または画家のハンドブック」「吸取紙とは何ものである、等々…」「およびデカルコマニー（転写）による連作二〇点（マチアス・グリューネヴァルトの幽霊）（初出：私の心臓は時を刻む」展—南画廊一九六二年）に焦点を当てる。吸取紙は、絵具やインクの余分な水分を吸い取り、水彩画などにおいてはにじみを抑えたり、色の濃度を調整する等の用途で用いられる。デカルコマニーは、一八世紀に開発された転写技法で、絵具などのメディウムを表面に塗り広げ、まだ乾いていないうちに紙などの素材で覆い、それを取り除くと模様が転写される。この技法はシュルレアリストらによって、偶発的なイメージを生み出す手法として用いられた。吸取紙もデカルコマニーも写し取られた「影」「分身」として生まれる。これら一連の作品は瀧口の「影像」という概念を考えるための糸口となるだろう。

瀧口修造の生誕二〇〇年を機に、二〇二三年から富山県美術館におけるコレクション展の一環として、瀧口旧蔵資料を分有する慶應義塾大学アート・センターと共同企画を行っており、本展はその第二回目にあたる。過去の共同企画展は以下の通り。「瀧口修造生誕二〇周年記念展示・ウィルソン・リンカーン・システムとしての（本）」（二〇一三年一月二日—二〇一四年二月六日）、「手紙と漂流詩」（二〇一四年十一月七日—二〇一五年二月一日）、「瀧口修造とジュアン・ミロ：二冊の詩画集と書簡」（二〇一五年十月九日—二〇一六年一月二日）。